

老人ホームでの体験から

半田 勝

現在老人ホームの運営に従事し、また老人ホームを建設するに当たり、老人ホームの設計、法人認可申請の手続きより運営に至るまで一連の手続きをして来たものであります。

法人設立後三カ年の間に、軽費老人ホーム長寿園（定員八〇名）、養護老人ホームの六甲台ビラ（定員五〇名）の二施設が完成し、日常運営を続けておりますが、これら施設は世界に類を見ない老人福祉法を根拠として建設されているものであります。ここで運営上大きな問題にぶつかるとありますが、諸問題に入るまえに養護老人ホーム、軽費老人ホームについて簡単に説明致しますと、養護老人ホームは、生活保護法より分離したものであり、設立目的は身体上、もしくは精神上または環境上の理由及び経済的理由により、居室において養護を受けることが困難なものを

収容する（多くの者は負担額なし）、軽費老人ホームにおいては低額な料金で家族関係の問題により居室において養護を受けることが出来ないものを収容し、給食その他日常生活上必要な便宜を与えるものであります。

ここにおける第一の問題として、同じ老人でありながら経済的理由を掲げられることにより、日常利用する施設の規準において、一人当たりの居室の面積は養護老人ホームは六・三平方メートル、軽費老人ホームは六・六平方メートルという格差があり、また一室当たりの収容人員は、養護ホームの三、四名、軽費ホーム一名を原則とすることになります。この大きな相違は処遇上大きな差別が行なわれているものであり、これらの基準は老人福祉を推進するに当たり妥当なものであるか、という疑問を持たせられるものであります。

第二の問題として老人福祉法と生活保護法との間における問題点について。養護老人ホーム入所に際しての費用は本人が恩給、年金等による収入が多少なりともある場合でも本人より入所に要する費用は徴収されず、これらの収入は本人の小使いとすることができ。しかし、一面本人が無収にもかかわらず、家族の収入が生保基準より多いと算定された場合において、家族は苦しくとも費用の一部負担をせられ、入所者は家族に対し肩身の狭い気持を持ち老後の生活を続けるという不合理な問題が生じるのであります。

医療費については、老人と医療は切り離せない密の関係にあるわけですが、現実には本人に収入のある人が治療を受ける場合、この一年間の間において各地方公共団体自身が老人医療の無料化を図りつつありますが、医療保護が適用されながらも、千円の収入でさえ検討を加えられ、この収入を医療費にまわされる事態が起こるのであります。

以上のように老人福祉法は施設に収容するのみの法であり老人福祉法における基本理念と全くかけ離れた状態にあり、健全で安らかな老後を保障することができないという、この二法のあいだにおける入所費用及び老人医

療の問題について大きな疑問があります。

第三の問題として老人と家族関係にぶつかるとあります。養護老人ホームにおいて、平均的に経済面においてはめぐまれます、また単身者、家族崩壊者等が多いため、性格的には一般に満足感をもち、生活指導上においても多くの困難は感じないのでありますが、軽費老人ホームにおいては、経済的には、恵まれているにもかかわらず家族との不和により入所することが多く、対人関係における不信感の保持、また今まで口に出せなかった家庭内の不満等の放出、と同時にこれらのうつ積状態より起こる精神不安定は処遇上大きな問題点となるのであります。

以上老人ホームの日常運営から見た場合の問題点を掲げましたが、これに対しキブツにおける老人の処遇はどのような状態にあるのか。自律経済、自律労働をたてまゝとして日常生活を支えていく社会において、老人の社会参加はどのように考えられているのであるか。またそれは老人の精神的健康にどのような影響を及ぼしているのか。この社会参加と家族関係について大いに探求したのであります。

次に老人扶養全般における経費の問題につ

いて、老人扶養、医療においては多額の経費を要するが、キブツにおいて総生産の何パーセントを充当しているか。そして、その割合は他の人々の一般生活にどの程度経済的負担を及ぼし、将来老人人口が増加し、反面子供の増加率は停滞していると伝えられているなかで、老人扶養の方法をどのように考えているのかを学びたい。それと同時に、キブツ内において老人扶養を義務づけるために、法規面において財政的うら付けを求めるのであるか。これは余りにも日本的と考えられるかもしれないが、キブツニツクは法規をどのように受け取るのかを知りたいのであります。

最後の問題として、家族と老人の問題であります。現在の日本では、老人と若人との「断絶」がしばしば取り上げられます。個人

労働の疎外の克服へ

石川政実

私の関心は「労働の疎外」の問題です。

これは、私の四年間のテーマです。

的に考える限り、これは起こり得ないと考え毎日解決に努力しております。キブツにおいては家族問題について問題を生じさせていないと聞いておりますが、大家族制度とも言えるキブツの中において、老人と若人との感情的関係、キブツにおける老人の地位、日常生活の方法等老人生活について、両者の感情面よりなぜ常に協力の下に円満な生活が送られているのかを探求したい。

この四年間、老人ホームの設立・運営の仕事を続けてきたが、日常の問題にとらわれ老人福祉の進むべき方向を見失い、問題解決にゆきづまった状態であり、新しい形の社会を見ることにより打破したいという念願からキブツに行けることを願望している次第です。

老人ホームでの体験から

半田 勝

現在老人ホームの運営に従事し、また老人ホームを建設するに当たり、老人ホームの設計、法人認可申請の手続きより運営に至るまで一連の手続きをして来たものであります。

法人設立後三カ年の間に、軽費老人ホーム長寿園（定員八〇名）、養護老人ホームの六甲台ビラ（定員五〇名）の二施設が完成し、日常運営を続けておりますが、これら施設は世界に類を見ない老人福祉法を根拠として建設されているものであります。ここで運営上大きな問題にぶつかっておりますが、諸問題に入るまえに養護老人ホーム、軽費老人ホームについて簡単に説明致しますと、養護老人ホームは、生活保護法より分離したものであり、設立目的は身体上、もしくは精神上または環境上の理由及び経済的理由により、居室において養護を受けることが困難なものを

収容する（多くの者は負担額なし）、軽費老人ホームにおいては低額な料金で家族関係の問題により居室において養護を受けることが出来ないものを収容し、給食その他日常生活上必要な便宜を与えるものであります。

ここにおける第一の問題として、同じ老人でありながら経済的理由を掲げられることにより、日常利用する施設の規準において、一人当たりの居室の面積は養護老人ホームは六・三・三平方メートル、軽費老人ホームは六・六平方メートルという格差があり、また一室当たりの収容人員は、養護ホームの三・四名、軽費ホーム一名を原則とすることになります。この大きな相違は処遇上大きな差別が行なわれているものであり、これらの基準は老人福祉を推進するに当たり妥当なものであるか、という疑問を持たせられるものであります。

第二の問題として老人福祉法と生活保護法との間における問題点について。養護老人ホーム入所に際しての費用は本人が恩給、年金等による収入が多少なりともある場合でも本人より入所に要する費用は徴収されず、これらの収入は本人の小使いとすることができ。しかし、一面本人が無収にもかかわらず、家族の収入が生保基準より多いと算定された場合において、家族は苦しくとも費用の一部負担を負わせられ、入所者は家族に対し肩身の狭い気持を持ち老後の生活を続けるという不合理な問題が生じるのであります。

医療費については、老人と医療は切り離せない密の関係にあるわけですが、現実には本人に収入のある人が治療を受ける場合、この一年間の間において各地方公共団体自身が老人医療の無料化を図りつつありますが、医療保護が適用されながらも、千円の収入でさえ検討を加えられ、この収入を医療費にまわされる事態が起こるのであります。

以上のように老人福祉法は施設に収容するのみの法であり老人福祉法における基本理念と全くかけ離れた状態にあり、健全で安らかな老後を保障することができないという、この二法のあいだにおける入所費用及び老人医

療の問題について大きな疑問があります。

第三の問題として老人と家族関係にぶつかっております。養護老人ホームにおいて、平均的に経済面においてはめぐまれます、また単身者、家族崩壊者等が多いため、性格的には一般に満足感を持ち、生活指導上においても多くの困難は感じないのでありますが、軽費老人ホームにおいては、経済的には、恵まれているにもかかわらず家族との不和により入所することが多く、対人関係における不信感の保持、また今まで口に出せなかった家庭内の不満等の放出、と同時にこれらのうっ積状態より起こる精神不安定は処遇上大きな問題点となるのであります。

以上老人ホームの日常運営から見た場合の問題点を掲げましたが、これに対しキブツにおける老人の処遇はどのような状態にあるのか。自律経済、自律労働をたてまゝとして日常生活を支えていく社会において、老人の社会参加はどのように考えられているのであるか。またそれは老人の精神的健康にどのような影響を及ぼしているのか。この社会参加と家族関係について大いに探求したのであります。

次に老人扶養全般における経費の問題につ

いて、老人扶養、医療においては多額の経費を要するが、キブツにおいて総生産の何パーセントを充当しているか。そして、その割合は他の人々の一般生活にどの程度経済的負担を及ぼし、将来老人人口が増加し、反面子供の増加率は停滞していると伝えられているなかで、老人扶養の方法をどのように考えているのかを学びたい。それと同時に、キブツ内において老人扶養を義務づけるために、法規面において財政的うら付けを求めるのであらうか。これは余りにも日本的と考えられるかもしれないが、キブツニツクは法規をどのようにに受け取るのかを知りたいのであります。

最後の問題として、家族と老人の問題であります。現在の日本では、老人と若人との「断絶」がしばしば取り上げられます。個人

労働の疎外の克服へ

石川政実

私の関心は「労働の疎外」の問題です。

これは、私の四年間のテーマです。

的に考える限り、これは起こり得ないと考え毎日解決に努力しております。キブツにおいては家族問題について問題を生じさせていないと聞いておりますが、大家族制度とも言えるキブツの中において、老人と若人との感情的関係、キブツにおける老人の地位、日常生活の方法等老人生活について、両者の感情面よりなぜ常に協力の下に円満な生活が送られているのかを探求したい。

この四年間、老人ホームの設立・運営の仕事を続けてきたが、日常の問題にとらわれ老人福祉の進むべき方向を見失い、問題解決にゆきづまった状態であり、新しい形の社会を見ることにより打破したいという念願からキブツに行けることを願望している次第です。

精神労働と肉体労働の分離についてですが、その中で特に肉体労働についての考察なのです。(キプツ)の(1)私的所有の廃止 (2)共同生産 (3)無賃金労働、という私的所有の止揚の中で(労働)はどのような姿であられるのか。これが私の(キプツ)への最大のねらいです。以下について、少し初期マルクスを大ざっぱに解説などしながら、僕の問題点を述べていきます。

序章

私は(キプツ)を(疎外論)との連関で捕えたいと思っています。マルクスの『経・哲手稿』の展開を(キプツ)という共同体の中で肉体を通して関わってみたい。(キプツ)の意味は大きい。私個人としては、現在のアラブにおけるイスラエルのシオニスト運動に対して、賛同しかねる点がありますが。

種々の点において、真の社会主義、共産主義とは何か、その問いに対して、イスラエルにおける(キプツ)は、一つの鍵を握っていることは、まず間違いないでしょう。

しかし、特に私のテーマは、(労働)の疎外にあります。協業↓分業↓大工業へと(労働)

過程)が進む中で、精神的労働と肉体的労働の分裂、(労働)の全体性の喪失、また労働者にとつての生産労働は、もはや自己の対象化の意味を失い自己に敵対してくる、という矛盾を生んでいます。それは、農村と都市の分裂として、現代の人間性の衰弱として提出しています。都会の知識人の衰弱、墮落現象の進行の中で、我々はいかにして止揚、復権できるのか？ では真の(労働)とはどのような姿なのか？ (科学)と(労働)と(自然)における、科学の意味と限界はなんなのか？ 急迫する問いが無数に沸いてく。

私流に結論を述べさせてもらいますと、精神労働をいかに肉体労働に接近させるか、まの自然に連関づけるか、これが私の問題意識です。それが(労働)の復権につながることを確信します。(i)知的労働 (ii)単純神経労働 (iii)肉体労働、そのように種々に分解している労働形態を、トータルに統合しうるには、原始的な労働形態を持つ肉体労働の再評価なくしては存在しえないのではないのか。また一方、知的労働も、もう一度なまに自然の生命体へ下降すること以外、衰弱現象を止揚する道はないのではないのか。(理性)すらも、

もう一度肉体へ自然に還元する作業の中で、種々の労働形態をもつ(労働)がつながるのではないのでしょうか。そのためには、マルクスの『経・哲手稿』にわずかではあるが見られる自然観をもっと推し進めて、D・H・ロレンスの生命観と結合する必要があるのではないのか。これが僕の直感的な仮説です。その実験をぜひとも(キプツ)で行なってみたいつもりです。

第一章・肉体の復権

10月8日ノンポリの私は、プリント主催の京都山公園集會を見に行きました。壇上に赤いヘルメットをかぶって、武装闘争を叫んでいました。しかし彼等の細い肢体を見るにつけ、淋しさと頹廃を感じずにはいられませんでした。彼等は、あと数分のち、巨大な肉体の機動隊の連中の中へ、ぶちあたるであろうに。彼等自身、すでに自からの肉体の中で、革命家たる肉体を喪失している。一つの疎外形態が皮肉な形で、彼等にまで及んでいる……。すでに農民の肉体を持ち得ない、自己矛盾テロ的行為をめざすなら、まずテロリストたる肉体を持たねばならない。

ただ成田闘争における全共闘の、農民と学生との連帯の成果については、私は大きく評価しなければならぬ。しかしながら、彼等に常時ひかれながらも、なにか一つ切れないものを感じてしまふ。もう一つなにか基本的な思想が欠落している。私なりの(疎外)の試論を今、行なってみます。

まず、日本の文学者は、またD・H・ロレンスは、産業機械の発展、疎外されていく個人、そのような問題に対してどのような方法でアプローチしていったのだろうか。産業主義の機械的な原理によって、自然の有機的な原理が敗北している、そのような現状について、D・H・ロレンスの手紙を見てみましょう。

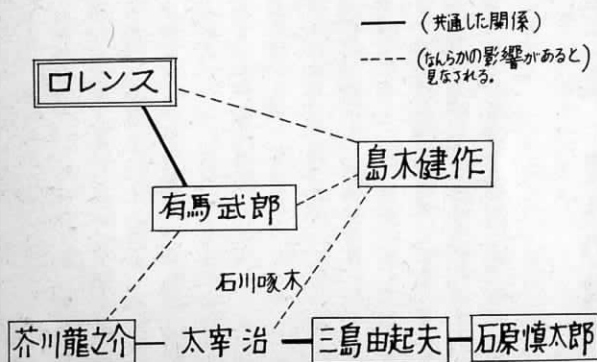
「ばくの偉大な宗教は、知性よりも賢明なものとして、血を、肉を信することなのだ。われわれは頭脳では誤まりを犯すことがある。だがわれわれの血が感じ、信じ、語ることは、つねに真実なのだ。知性とはくつわや手綱にすぎない。知識などになんの関心がある。ばくの欲するのはただ、精神だの、道徳だの、なんのくだらない干渉なしに、直接、ばくの血に答えることだ。人間の肉体は、ろうそくの炎のように、つねにまっすぐ

に立っているが、しかもつねに燃えている炎のようなものだとは思う。そして知性と、は、まわりの事物の上に投げられた光にすぎない。ばくはまわりの事物——ほんとうは精神なのだが——になど、関心はなく、どんなふうにしてかは神のみぞ知るだが、実際にどこからともなくやってきて、それが照らしだすそのまわりのものが、どんなものであれ、それ自身であるところの、永遠に燃えあがる炎の神秘にこそ関心があるのだ。われわれはあまりにも滑稽に精神化しているため、われわれ自身がなんであるか忘れて知らない。われわれが照らしだす事物しか存在しないと考えている。……略」

少し長く引用したが、ここにロレンスの(科学)への、文明への批難が読みとれるであらう。

全裸の姿で、太陽の炎に対して、その中で宇宙の肉声を聞こうと彼はした。そして、その自然への交信の唯一のものとして、肉体を、性の結合を置こうとした。自然の母胎に入ろうとするのである。彼は、青白い衰弱した知識人を、誰よりも嫌った。彼は、人間を大きな生命体として、自然の中の宇宙的広がりであらえようとしている。人間の復権をかけて。

『チャタレー卿夫人の恋人』で、男女の真の「やさしさ」によって現代の空虚と墮落から抜き出て、真正な充実と健康をとりもどそうとした。マルクスには、ロレンスのこのような生命像を感じえないのは、私だけであろう



か？ いずれにせよ、ロレンスも、精神と本

能「自然との疎外をテーマに追求し、そこで彼は、止揚として、自然への（肉体）の還帰を通じて、調和をさぐろうとした。

しかし、その問題はまた、日本の文学者にとっても必死のテーマであった。

精神的労働者の無力、限界、嫌悪、そのような問題の、ロレンスの展開を日本でおこなった小説に、有島武郎の『或る女』をあげる事ができる。精神的労働者として、貧弱な体質の女々しい弱点をもった木部という男と強く激しい海上に生きる船長を対比しながら主人公は、船長の野生に、女の本能が魅せられ、じゅうりんされていく。ここにまた有島武郎の敗北がある。彼はまきれもなく木部なのである。肉体労働に対する知的労働の限界が彼によって提示されていく。

そのテーマは、また石川啄木や太宰治にも波及していく。

ただ太宰の場合は、あくまでも芸術、理性の立場により自閉的に展開しようとする。彼は、肉体に対する（恐怖）として、自己の肉体を自虐、解体する中で、下降し、一般大衆とつながろうとしていくが、また反面、理性的自己を正当化しようとする綱渡りをする。そして敗北する。

その作業を、観念的に（肉体）と（精神）の二元論の中におくことにより、肉体をメカニックとして組み入れたのが三島由紀夫であった。しかし、彼の（肉体）には、ボディビルとしての形骸化された肉体として、（労働）やなまの（自然）との連関が消失されている。ロレンスの描く宇宙とつながる生命像、土の臭いがないのである。彼は、それを（行動）で肉体に生命をあたえようとするが、島本健作は、転向という状況の中で、日常性から、真理を学んでいこうとして、『生活の探求』を発表する。ここで主人公は、封建的な農村共同体の中へ下降することによって自己の観念性を乗り越えようとする。

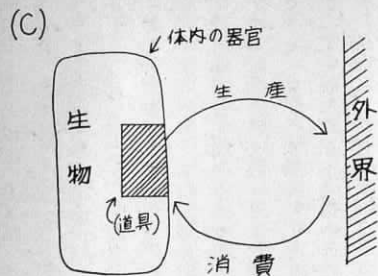
現代では、三島の（行動）という問題意識をうけついで石原慎太郎が登場してくる。文壇の観念作業にみきりをつけ、彼は、行為スポーツを通して、自然と人間との激しい関わりあい、その内現代人の衰弱の止揚を試みようとする。三島の見失っていた（自然）と（肉体）との、なまのかかりあいに彼は成功していく。しかし、彼にも（労働）という問題に対して解答を出しえないのが現状であらう。彼もまた完全に精神労働、肉体労働の疎外の止揚に成功していない。

第二章・疎外の構造

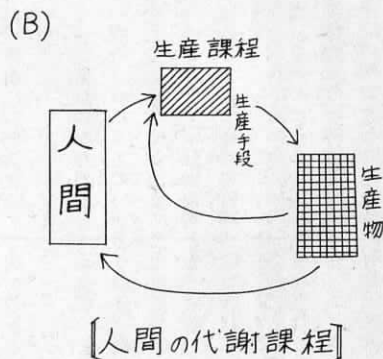
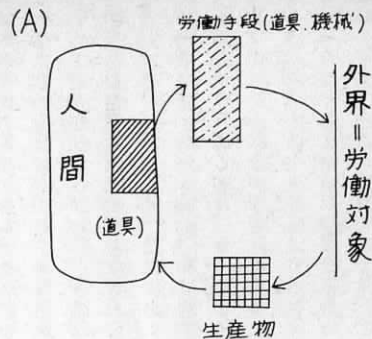
簡単ではあるが、文学の上から（疎外論）をみていくと、このような悪戦苦闘の歴史がある。ただ前述でわかるように、日本では、ロレンスとちがって（肉体）について、なにか重い罪意識と密着した形で展開されている点である。（性）に対する考えにも共通しているのだが、やはり仏教、大乘仏教の影響によるのだろうか。また、どちらかというと、日本では女性的な文明で、（肉体）というような思想的土壌が欠落している。浄土真宗によるものなのであろうか。

その意味からも、日本は非常に特異であり日本の文学者も二つの意味で苦しまねばならなかったであらう。どうしても、日本を外国から見なおす必要性を私も感じてくる。その意味においても（キプツ）へ行きたいのか？

先程から、「疎外」「疎外」といって、その解決のためにキプツへ行くんだと述べていたが、ではマルクスの（労働過程）を少し考えてみたいと思います。どこから疎外がおこるのか？



〔生物の代謝過程〕



〔人間の代謝課程〕

まず労働過程とは、物使用価値を作る過程であるけれども、人間は労働過程で自然に対して目的の定立をし、立てた目的に応じて自然法則を意識的に利用する。そのために道具を用い、神経・肉体を緊張させ、物を作りあげていく。

なるほど他の生物も図(C)に示すように外界に対して物質代謝過程を行ないますが、他の生物の場合は、目的定立がない。その自然利用は、あくまでも（本能）によってである。

(1)人間は、意識的に自然に対立して目的定立をすると言えます。

(2)人間は道具が体外にある。他の生物にお

いては、道具が体内にある関係上、生産と消費の分化がおこらない。しかし人間は、生産過程消費過程の分化がおこなわれる。（図(A)参照）

(3)人間は、自然への働きかけの多様性をもつ。人間は他の生物と異なり、体外に道具を持つ利点により、これを媒体として自然に対して多様に働きかけられる。

図(B)のように、生産物の一部は、直接に消費されずに労働手段と労働対象（原料）に転化される。人間は生産物の一部を消費して生存し、生きた労働として、生産物の一部である労働手段をもって、労働対象原料に働きかけて再生産をおこなっていく。このような立場からマルクスは、人間の自然への物質代謝過程の大きさ、範囲を、労働手段の発展を軸とする生産力に見る。生産手段の補佐能力によって。

「物を作ることによって、人間は自然をかえ、同時に人間が自分自身を作りあげる。」このような「本来の労働」が、労働者にとって、労働者は、彼がより多く富を生産すればするほど、彼の生産力が力と富を増せば増すほど、それだけいっそう貧しくなる。労働者はより多く商品を生産すればするほど、彼

はそれだけいつそう安い一個の商品となる。」
（経・哲手稿）という現実、いったい何故
おこるのであろうか？

マルクスは、それを生産手段の私的所有に
見る。この私的所有が、労働者の労働を、彼
等のための労働でなく、他者のための労働へ
と転化させていく。また労働を指揮するもの
（精神労働）と、他人の命令で、無目的に強
要される労働者の一群（肉体労働者）との分
裂を生む。自己の労働の外化として、労働者
の前に立ちはだかる生産物の群れ。

その解放は、私有財産制度の廃棄によつて
達成される。私有財産制度が廃棄されたとき
労働はその本来の人間の本質にかえる。い
つさきの人間が人間にかえる。疎外された労
働において労働者からうばわれ、人間にたい
して敵対した自然も人間のもとにかえる。そ
して人間はみずから生んだ自然にかえる。
もはや分裂していない人間の労働は科学と和
解し、自然をより深く知り、そのことによつ
て、自然のふかみに上つてゆくであろう、と
マルクスは語る。

しかし、はたしてそうなのだろうか？ た
だ単に、私的所有からの解放によつて、我わ
れはみずからの自然に還りうるであろうか？

もはや我われの肉体すらもが、文明にむしば
まれて人工的な様相を示しているのではない
のか？ またマルクスがいう自然とは、あく
までも「自然もまた、人間から分離されれば、
人間にとって無である。」（経・哲・手稿）に
みられるように、物質として、人間の対象化
として、また人間の労働の加わった自然、第
二義的自然ではないのか。このような自然観
ではたして我われはとどまっていけるのだ
ろうか。マルクスのひとつの大きな支えには
「自然科学」への信頼が主軸になっているの
だが、現代の公害を考える場合、このような
生命的でない自然観でよいのだろうか。我わ
れは、本当に「科学文明」で何ができるとい
うのか？

もつと生命的なものとして「自然」を考え
ない限り、マルクスのいうようには、我われ
は決して「自然にかえる」ことはできないで
あらう。たとえ、社会主義となつても、やは
り「科学」による自然破壊が続けられている。
「科学」、もう一度これ自身をも疑つてみる
必要はないのだろうか。また現在進行してい
る肉体労働と精神労働の分裂を、ただ単に生
産手段の解放や、肉体労働に対する高賃金だ
けで止揚しようとでもいうのだろうか。この

分裂は、今日のな問題として存在していると
いうのに。工場で単純労働の毎日、いった
いいかなる「労働」の喜びがあるというのだ
ろうか。自然と隔離された、機械と油の中で
たとえ共産主義社会が世界で実現できたとし
ても、この労働過程の分裂形態、精神、肉体
労働の分離を、いかに止揚するもくろみ
があるというのだろうか。しかも「科学」は
まがいなく、地球も、人間も、すべてを破
壊していくであろうに。

やはり、私はそこにマルクスの限界をみな
い訳にはいかない。やはり、もつとなまに自
然に対する意志が欠けていたのではないのか
やはり、ヘーゲルの影響が、「理性」に対し
てマルクスでは「自然科学」として再来した
のではないのか。ここでロレンスのあの生命
像、自然像、人間像を、マルクスの中に導入
する必要がある。もうその時期が来ている。
これが私の結論です。

終章

今日、中国の「農村による都市包圍」、農
村に鉄をわざわざ運んできて加工させること
そのような作業の中の農村と都市との分裂

私はどうしても、それをこの肉体を通して
自分の目で考えていきたい。そのような意味
で、私はキブツを選びました。

「労働」とはなにか、これが僕の一生のテ
ーマです。

イスラエルの土をふみたい（遺稿）

須藤宝治

序

キブツ研修生の応募論文の中でも、きわ
立つて情熱のこもった以下の論文を書いて
くれた彼、須藤宝治君は、一月十五日に合
宿を終え、そのあと旅行社などかけ廻り
未来に賭けることに燃え立っていました。
合宿中も激しい意気込みで、例の広い額に
縦じわを寄せ、それでいてユーモラスに、
質問し、笑い、笑わせ、決断した者の解放
感を、我われにさわやかに示してくれまし
た。

彼の悲報に接したのは別れて二週間とた
たぬ間でした。広島から岡山への出張の途

中交通事故に逢ったとのことでした。
彼の論文をここに繰り返し、繰り返し読
みつつ、鬼気迫るのを覚えます。両親すら
なかつた彼の命まで奪うことが、未来の決
心まで奪うことが、なぜできるのか。彼に
ともつた灯は、けつして消えまい。

（制作部・百瀬）



時間に追い回される毎日の生活の中で、よ
うやく、自分のものとなったひととき、考え
ることは、いつも同じであった。「このまま
老いさらばえて死の床につきたくはない。こ

れでは自分が、今生に生を得た意義を見出すこともできなければ、現在の存在理由すらあり得ない。何かしなければ。何か……。」

私は、現在働いている。月給六万円と何千円也を取得する為に、自分の持ち得る唯一の能力、つまり労働力を切り売りしている。これをしない限り、私は、今日の晩御飯のおかずさえ、手にすることができないのである。

「働かざる者は食うべからず」確かに、真理だ。しかし、現在の資本主義社会の中にあつて（働く）ということは、ただ、食う為にすぎない。万物の霊長たる人間としての存在が草原で草をはむ牛や馬のような存在であつてよいものであろうか。しかも、虚偽とかけひきの中で、自分自身すらも欺かなければ、その務めを果たし得ないような、その存在を否定してはいけないものだろうか。

（働くこと）それは、自分自身の欲求として、人間の生命活動の一つとして行なわれるものであり、人間的自由の現実的表現でなければならぬ。『新しき村に就いての対話』の中で武者小路実篤は言っている。「自分は労働を呪ひはしない。しかし食う為にいやいやしなければならぬ労働は呪ひたい。労働は、男は男らしく、女は女らしくする労働で、

人間を人間らしくする労働でなければならぬ。労働という名は、新しい時代に於いては中世における武士と言う名と同じく誇りある名でなければならぬ。人々は強いられず、名譽の為に、人類の為に労働するのである。労働は享樂ではない。しかし人間としての誇りある務めだ。そして人々は喜びと人間の誇りをもって労働する」と。

現実と理想の何という食い違いであらうか。しかし、そんな自問自答をくり返していた六月のある日、私は、知ったのである。（キプツ）というものの存在を……。それは、全く偶然の邂逅であつた。いや探してあつたのだ。私は旅が好きで、この時も日南から宮崎の方へ貧乏旅行を続けている行程の三日目の夜であつた。ユース・ホステルのミーティングに出席すると、例の如く、武者小路の新しき村的思想の持ち主を探さべく問いかけたのでした。いつもは、白けたようにだまりこんでしまふ若者達の中で、その時、その夜のミーティングの時には、何と幸運なことか、キプツというものが存在していることを知らしめてくれた男がいたのである。ミーティングの終了後、彼に喰いつきそうになりながら問ひだした。そして語り合った。

キプツにおいては、私的所有を否定し、労働内容による社会的差別 および貧富の差が生じていず、既存の社会主義国の様な偶像崇拜主義的な思想もない存在であることを、聞き知ったのである。そして驚愕した。それでは、まるでユートピアであり、幻の桃源郷ではないか。それが故に、その思いが口に出た、その信ぴょう性を疑う様な言動をしてしまった。すると、彼は、怒鳴るように、「疑うのなら、勝手に疑え！しかし、自分の目で、そして耳で、イスラエルの実際を見、キプツの存在を確認してからするんだな。」そう言つて、そのまま行つてしまつたのである。その夜は、眠れなかつた。そして矢も楯もたまず、急ぎよ、広島に舞い戻ると、すぐ様、日本協同体協会に電話し、その真意を伺ひ、そしてそのまま入会したのである。勿論、（イスラエル）という国はもとより、（キプツ）そのものの本質も、ほとんど何も知らないと言つてよいような状態でした。そんなわけで、今まで無為に過ごした日々が、悔まれてならない様な気持ちになり、何としても、この遅れを取り戻そうと、協会で紹介して頂いた参考文献や、『月刊キプツ』等を、少しづつ読み込んでいったのです。が、しかし、余り

にも不明な点が多すぎました。不明な点を不明なままにしているのは、それこそ取り返しがつかないことになるのではないか、という不安が、頭の中をよぎりましたが、周囲には、指導してくれそうな人もみあたらず、とうとうたまたま、協会に救援を求めたものでした。その時、「広島県下にも、五、六人の会員がいるから、お互いに連絡を取り合いなさい。」と御指導頂いたのです。それでは何としてでも連絡をとつて、色々教えて頂く様な機会を設けようと考え、できる限り近い将来、読書会を開こうと思ひついたのでした。日本経済は、高度成長をとげました。国民総生産——GNPは、世界第二位を占め、物質文明は百花乱舞のあり様である。しかしながら街路を歩く時、目の前のショーウィンドに、「いつでもお持ち帰り下さい。」と言わんばかりに、陳列してあるそれらの物質は、貨幣という労働力の代価の存在を抜きにしては、私達の欲求を満たしてくれないのです。

ところが、現在の資本主義社会では、生きる為の労働からの自己解放を叫んでいては、その貨幣を、多量に取得することは不可能なのです。ただ、やみくもに働かなければ……。時間に追われ……、考えることなく。しかし

そうでない人々もいます。極くわずかな人々ですが、経済のピラミッドの底辺にうごめく多数の労働者の上に、胡座をかき資本家達です。彼等は、労働力を切り売りすることもなく、莫大な量の貨幣を手にし、欲するものもいつでも手にすることができのです。この差別と、この大いなる矛盾、この存在を否定し、抹消することに私は、私の人生を賭けることにしたのです。たとえ、すぐ様、その成果が現われなくても、一生を通じてその目的を追いもとめるならば、自分自身で自己の人生の意義を掴み得るであらう。

ところで、この資本主義における矛盾を否定する為の具体的な方策も、ほんのちっぽけな光明も、現在の私には、見出し得てない。ただ、武者小路先生の「新しき村」における思想には、深く感銘を受け、心酔し、暴力革命を否定しながらも、実際的に、その実現への具体性を秘めている唯一の手段であることを、確信していたのです。しかし、この新しき村の運動は、今年で五十三年目に入ろうとしているにもかかわらず、私達が日頃耳にする様な、具体的な成果を未だ知りません。表面的な成果を云々するわけではないが、二十余年の歴史しか有さない中国の人民公社、

イスラエルのキプツの存在を知るに至り、何がそれほどの差異を生じせしめているのかを知りたく思ふ様になつたのです。

勿論、具体的な条件の相違、および必要性の問題等のように、明確に理解できる点も多いが、それだけではない。何かが、存在することを信じて疑いませんでした。それを知ることとは、勿論、それと同時に、キプツそのものを自分の目で、肌で確かめたく思ひ始めたのでした。諺に、「百聞は一見にしかず」というのがあるが、正に至言であると思う。更に根本的な観念として、この資本主義の世の中で育つた私にとって、私的所有を否定した貧富の差の無い社会が存在することを、理論の上では認め、創り出そうとしているにもかかわらず、気持ち、いや感情の面では、どうしても信じきれないのです。

私はどうしても、イスラエルの土を踏まずにはいられなくなりました。どうしても、彼の地で……。